編集後記

気象庁の宣言にもかかわらず、乾いた過ごしやすい日々が続き、16年ぶりの夏場の給水制限が噂される梅雨の後半、帳尻を合わすかのような豪雨で土砂崩れのニュース。降れば土砂降り。自然は時に、それに対する人間の営みをあざ笑うかのような姿を見せます。

昨年の同月号で新型インフルエンザのパンデミック対策行動計画の策定に関する報告が載りました。それから1年、メキシコに始まった新型インフルエンザは、弱毒型とはいえ瞬く間に世界中に広がり、WHOからphase6パンデミックの宣言がなされました。テレビ報道を賑わした違和感を持つほどの完全な予防衣とサーモグラフィーで行った日本の徹底した水際作戦も一旦崩れると、まさに千里の堤も蟻の穴からの諺のごとくあっという間に全国に広がりを見せております。東大医科研からウイルスの変異の報告もなされました（6月15日現在）。新型インフルエンザの問題は真栄田篤彦常任理事から報告された九州医師会連合会第97回定例委員総会ならびに第1回地区医師会長会議の主要議題の一つにもなっており、我々一人一人にとってもその対応は決して対岸の火事としてはならないものと考えられます。

第1回地区医師会長会議でのもう一つ議題である在宅医療支援システム・ネットワーク構築は、玉井修理事から報告のあった終末期医療をめぐる座談会のなかでも、問題点として挙げられた在宅介護力を補うシステムとして早急に構築の望まれるものであります。

このようなシステム、ネットワーク構築の鍵となるのはやはりマンパワーと考えられます。同じく玉井理事から報告のあったマスコミとの懇談会の中で、圧倒的な医師不足と偏在の中で、幸いにも沖縄に集まる研修医の教育プログラムの中で、離島及び地域医療を念頭に置いた県立中部病院と琉球大学の取り組みは、この問題を解決する礎になるものと期待されます。

一方でこのネットワーク構築を期待される沖縄県立病院ですが、受け皿として病院本体の経営健全化が急務とされ、そのなかで、今回のインタビューコーナーでは、4月から県立南部医療センター・こども医療センター院長に就任された大久保和明先生に伺いました。その内在する県民の財産である同センターの重要性を認識して頂き今後の経営健全化計画の推進を図る旨のご発言を頂きました。

生涯教育では、南部医療センター・こども医療センター心臓血管外科の長田信洋先生からご寄稿頂きました。長年にわたるご経験と研究から、全国トップレベルの成績を誇る小児先天性心疾患外科治療のあらましについてご教示頂きました。またプライマリ・ケアコーナーでは、沖縄協同病院の名護宏泰先生から突き指の診療についてご指南頂きました。たがが突き指と思うなかれ、手術を要する病態が含まれていることに驚きました。

若手コーナーの浦崎貴志先生の医療IT製品の利便性と使ってわかる欠点は、日々電子カルテと格闘する我々にもうんうんと頷ける内容となっております。

上江洌良尚先生のロゴマークは、その診療所外観とも相まってまさにカフェと間違えるモダンな印象を受けるものでした。

源河圭一郎先生からは笑い話のごとき昔話も交えて長年取り組んでこられた禁煙運動についてご発言を頂きました。

金城忠雄理事からは、沖縄県自動車保険医療連絡協議会から、交通事故の減少傾向、沖縄の問題点として自動車保険加入率の低さ、自賠責保険診療費算定基準について報告を頂きました。

愛の血液助け合い運動月間にちなんで県立南部医療センター・こども医療センターの大城一郁先生から、限りある血液製剤の適正使用について提言を頂きました。

今号の随筆は長嶺信夫先生の沙羅双樹で、数年にわたるご執筆で我々も少しだけこの花について詳しくなった気がします。気がするだけですが…まだまだ詳しくなれないのは公益法人制度改革の件です。真栄田先生からの報告を伺ってもふーん、広報委員会でさる先生から説明を聞いても大変だーと法律・制度への弱さを露呈したところで編集後記とさせて頂きます。

広報委員　豊見山 直樹